



(桜井)

奈良・金剛寺遺跡

- 1 所在地 奈良県磯城郡田原本町大字金剛寺
- 2 調査期間 一九八七年(昭62)五月～六月
- 3 発掘機関 田原本町教育委員会
- 4 調査担当者 藤田三郎
- 5 遺跡の種類 中世居館・寺院・集落跡
- 6 遺跡の年代 一二世紀～一八世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

金剛寺遺跡は、奈良盆地のほぼ中央、田原本町の西端に位置し、現在の金剛寺集落と一部重複しながら北側に広がり、曽我川を挟んで広陵町に接している。標

高約四五mの沖積地に立地し、このあたりは高田川・葛城川・曽我川・飛鳥川が近接して北流し、合流した後は大和川となって大阪平野へと流れ込んでいる。

遺跡は古墳時代前期から近世にかけての複合遺跡で

あるが、中世居館跡が中心となる。中世居館跡の推定規模は南北三〇〇m、東西一〇〇～一三〇mの範囲と考えられる。これは遺物の分布状況や地割、小字名(北口・西口・城畑・土手矢倉・阿弥陀院)などから推定でき、遺跡としては良好な残存状況を呈している。江戸時代以降は金剛寺集落が形成され、現在に至っている。

発掘調査はこれまでに三次にわたって行なわれている。いずれも小規模な発掘調査である。第一次は遺跡のほぼ中央にあたる小字名「土手矢倉」で実施し、十字に交差すると考えられる大溝を検出した。第二次は遺跡の北東端で平安時代の河川と中世の大溝六条(幅三～六m、深さ〇・八m)を、また、第三次は遺跡の西端で居館を囲む環濠を検出した。

今回紹介する卒塔婆が出土したのは第一次調査である。この調査は長さ三〇m、幅二・五mほどの細長いトレンチ調査であったが、鉤の手状になる三条の大溝を検出した。この大溝は室町時代(一六世紀)のもので、居館との位置関係から屋敷を区画するものと考えられる。注目されるのは、東西方向に走行する大溝SD五二(推定幅八m、深さ一・四m)で橋脚を検出したことである。橋脚は二列の杭で構成されており、橋脚の幅は約一・五mで小規模な橋と推定される。卒塔婆は溝の中層、橋脚の東側下から出土した。

この大溝からは大量の遺物が出土している。土器が最も多く、土師器の皿・羽釜、瓦質の摺鉢・羽釜・鉢、施釉陶器、磁器など

がある。木製品としては下駄、羽子板、漆器碗・蓋がある。このほか、砥石やサヌカイト製の火打ち石、送風管、土製円板、土鈴、軒平瓦、銭貨（聖宋元宝）が出土している。

8 木簡の积文・内容

(1)

(梵字)

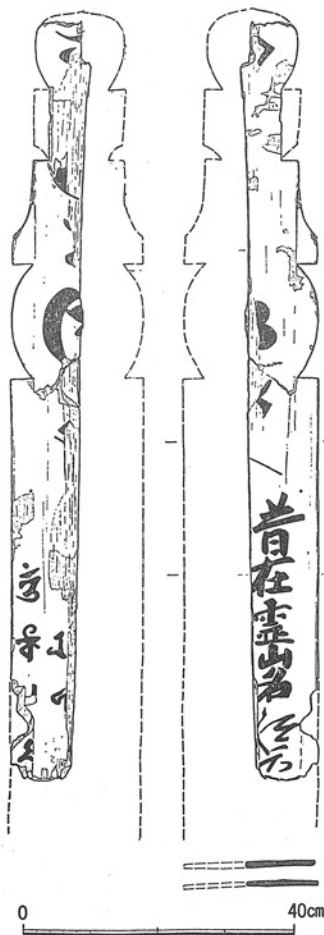
昔在靈山名□□

(梵字)

3 (梵字)

(11.8g) × (1.02) × 9 061

空・風・火・水輪部には梵字が書かれているが判読不能。地輪部には「昔在靈山名」まで読めるが、以下二字は書体がくずれ読めない。二行にわたっていたと考えられる。年代は、共伴した土器から一六世紀後半に比定できる。これは『続南行雜錄』にみえる永祿五



年（一五六二）の金剛寺城の破却にほぼ合致する時期のものである。

本卒塔婆は、墨書の部分が浮かび上がっており、長期にわたって風雨にさらされていたようである。また、中央右端には釘穴があり、何かに打ち付けていた可能性が高い。出土地は中世の居館跡と推定されるが、調査地の南には「阿弥陀院」の小字名があり、また、一八七四年（明治七）に廃寺になった「阿弥陀寺」がこれに推定されることから、居館の南側には寺院が配置されていた可能性が高い。卒塔婆は卒塔婆堂などこの寺院の建物に打ちつけられていたと推定される。

9 関係文献

田原本町教育委員会『金剛寺遺跡発掘調査概報』（一九八八年）

（藤田三郎）